

〔嘉永明治年間録〕天文久元年五月廿日、彗星乾方ニ出ツ、天文方建白書

此頃每宵乾方彗星出現に付、天文方上書寫、彗星は西説に寄候へば、一種の行道の違ひし星にて、限りも無き遠天より、太陽天へ環り來り並び、遠天へ還り候星に有之、太陽天へ近づき候節は、自然地へも近く相成候事故、人目に見え、遠天へ還り候得ば地に遠く相成候故、人目に及不申候、其行道皆長象形にして、各長短不同故、再出の年間遠きは八九年、其最近き者は、三ヶ年餘にて、再出の年間一周仕候ものも有之候、右様數年來測量仕り、豫め再出の時節を推歩致候程に相成候上は、決て妖星と申には無之、一種の奇星と可申程の儀に御座候、漢土にては兎角吉凶の點候有之、多くは舊きを除き、新を布く杯申候へば、其形容箒に似寄候を以て、支那人の文を巧みに認め候様に存候、當今専ら西洋究理の説御採用の折柄に付、私共於御役筋にも、吉凶の有無の儀は差置びたすら測量にのみ必志を盡し罷在候、且又其色に隨ひ、其現る、場所より、兵革水火の災、或は國王大臣の患杯と漢説に相見候得共、明和六年七月の彗星は、其長サ七十度に餘り、光芒は兩脇へ相見候由、舊記に相見、至て異様の形狀に候得共、別に奇異と申程の儀も無之、由申傳候、殊に彗星の天際に現れ候は、日本計に相見候には無之、万国共に見受候事故、素より何れの國、誰の人事と、吉凶に拘り候儀は、毛頭有之間敷候事、

客星

〔和爾雅〕天文一客星常不見星曰客星、怪星同、或犯月犯北斗星謂之犯星、

〔晉書〕天文二客星、張衡曰、老子四星、及周伯、王蓬絮、芮各一、錯乎五緯之間、其見無期、其行無度、荊州

占云、老子星色淳白、然所見之國爲飢、爲凶、爲善爲惡、爲喜爲怒、周伯星黃色、煌々、所至之國大昌、蓬絮星色青而熒々然、所至之國氣雨不節、焦旱物不生、五穀不登、多蝗蟲、又云、東南有三星出、名曰盜星、出則天下有大盜、西南有三大星出、名曰種陵、出則天下穀貴十倍、西北三大星出、而白名天狗、出則人相食、大凶、東北有三大星出、名曰女帛、見則有大喪、